

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red
Cross Kyushu International College of
Nursing

訪問看護ステーションにおける効果的な在宅看護実
習を目指して：第1期生の臨地実習の評価

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-02-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 裕美, 乗越, 千枝 メールアドレス: 所属:
URL	https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/493

訪問看護ステーションにおける 効果的な在宅看護実習を目指して

第1期生の臨地実習の評価

こばやしひろみ のりこしちえ
小林裕美* 乗越千枝**

*日本赤十字九州国際看護大学 地域看護学・講師

**鳥取大学医学部保健学科 地域・精神看護学講座・准教授

はじめに

1997年度より看護基礎教育に在宅看護論が取り入れられたが、その後の介護保険制度導入をはじめとする社会状況を反映しながら、在宅看護を取り巻く環境は大きく変化している。今後、在宅看護において看護職として役割を担っていく学生に、在宅看護論実習において何を学ばせるかは重要な課題である。日本赤十字九州国際看護大学（以下、本学）は2001年度に開校し、1期生（105名）が2003年9月～2004年

7月に各領域の臨地実習（以下、実習）を行った。在宅看護実習は訪問看護ステーション（以下、ステーション）を拠点として実施し、その結果を評価したので報告する。

実習の概要

実習目的は、「在宅療養者とその家族に対する在宅看護の実際と展開方法を知り、在宅という場における看護職の活動と役割を学ぶ」とした。実習目標は、以下の4つとし、実習目標に対応した14の評価項目を設定した（表1）。

表1 実習目標に対応した評価項目と平均点

実習目標	実習目標に対応した評価項目	自己評価	教員評価
1)	1 在宅療養者とその家族を理解するために必要な情報を収集できる	3.79	4.27
1)	2 在宅療養者とその家族の心理を理解することができる	3.66	4.23
1)	3 訪問時の在宅療養者の生活環境の実態を、情報としてとらえることができる	4.10	4.35
1)	4 在宅療養者とその家族の健康問題に影響する因子から問題点を抽出できる	3.73	3.83
1)	5 在宅療養者の家族の介護負担と介護負担感についての視点をもつことができる	4.17	4.41
2)	6 在宅療養者の家族の生活環境や生活習慣に応じた援助方法の必要性を理解できる	4.26	4.43
2)	7 在宅療養者とその家族への援助の実際を見学し、療養者および家族の反応をとらえることができる	4.15	4.30
2)	8 在宅という場における看護の役割について自分の考えを述べるができる	4.30	4.46
2)	9 継続看護の重要性について自分の考えを述べるができる	4.13	4.24
3)	10 在宅療養者を支援する制度や社会資源サービスについて説明できる	3.44	3.99
3)	11 在宅療養をささえる専門職種の活動と連携の実際を説明できる	3.82	4.18
3)	12 看護職としてのケア・コーディネートの視点について自分の考えを述べるができる	3.52	3.95
4)	13 訪問者としてのマナーに配慮し、相手を尊重した言葉遣い、態度で接することができる	4.62	4.07
4)	14 訪問時に知りえた在宅療養者とその家族のプライバシーに配慮できる	4.75	4.49

【実習目標】

- 1) 在宅療養者とその家族を身体・心理・社会的側面から総合的にとらえることができる。
- 2) 在宅療養者とその家族への実際の援助活動をとおり看護の役割を理解できる。
- 3) 医療・保健・福祉の連携と社会資源の活用方法を理解できる。
- 4) 在宅療養者とその家族、および医療チームとのよい人間関係を築くことができる。

実習施設（拠点）は県内の8か所のステーションであり、設置主体や看護師数、訪問件数などはさまざまだが、どのステーションも質の高い看護を展開している¹⁾。ステーションの規模に応じて2～5名の学生を配置して、直接的な指導はステーション側に依頼し、教員はカンファレンスなどで学習内容の確認を行う。

実習スケジュールは、まず実習開始前に学内でオリエンテーションを行った後、ステーションを拠点に訪問看護の見学・実習を4日間行う。最終日に学内実習を1日行い、グループワークと全体討議により学習内容のまとめを行う。実習をとおりステーションが実施している質の高い看護に触れること、すなわち訪問看護への同行（以下、同行訪問）を最も重視している。

実習の実施結果

1. 同行訪問の実施状況

学生105名の同行訪問件数は延べ961件で、学生1人当たりの平均件数は9.12件（4～19件）であった。祝日などにより見学・実習が3日間であった者が24名含まれるため、実際には学生1日当たり2.4件である。

同行訪問事例の背景を記録から集計したところ、性別は男性410件（42.7%）女性551件（57.3%）で、年齢は1～101歳、平均年齢73.05（±18.72）であった。主疾患は、脳梗塞161件（16.8

%）、統合失調症132件（13.8%）、悪性新生物80件（8.3%）の順であった。「障害高齢者の日常生活自立度」別では、ランクC：20.9%、A：20.9%、B：18.5%、J：10.8%、不明・判定困難：29.1%であった。また、介護保険の要介護度別では、要介護5：29.5%、要介護4：18.2%、要介護1：17.9%の順であった。

学生が見学や一部援助を行ったケア内容は、表2に示すとおり服薬管理、リハビリテーション、入浴介助の順に多かった。

2. 学内における実習のまとめ

学内では、2～3か所のステーションで実習した学生を1つのグループとし、ステーションの様子や訪問事例について話し合い、さらに在宅看護に関するテーマを決めて討議した。主なテーマは、「在宅と病院の違い」「介護者について」「家族について」「介護負担について」「信頼関係について」「他職種との連携」などである。全体討議においては、ステーションの特徴を比較してさまざまなステーションがあることを理解し、また対応困難例や難病をもつ方、ターミナル（在宅死）の方、精神科訪問看護などについての事例を共有した。

3. 学生が学んだこと（終了レポートから）

学生には、実習終了後にレポートを課しており、その一部を表3に示した。学生は、在宅という「場」の空気を感じ取り、さらに訪問看護師の療養者・家族へのかかわりを見て、その価値観に合わせた援助の難しさを理解している。訪問看護師の専門的な知識・技術、特にコミュニケーションの技を目の当たりにし、療養者と家族から信頼されていることを感じ取っている。また、サービスの利用者と提供者という契約に基づく関係や、人間関係が深まるにつれて距離のとり方が難しくなることも学んでいる。

表2 訪問時の主なケア内容

(重複回答) n=961

主なケア内容	件数 (件)	延べ訪問件数に 対する割合 (%)
服薬管理	313	32.6
リハビリテーション	248	25.8
入浴介助 (シャワー浴含む)	222	23.1
精神的援助 (精神疾患、認知症の場合のみ)	185	19.3
清拭	157	16.3
排便管理 (浣腸・摘便)	104	10.8
寝具交換	98	10.2
陰部洗浄 (入浴介助がある場合は除く)	79	8.2
部分浴介助	73	7.6
褥瘡処置 (創傷処置含む)	72	7.5
胃瘻管理 (経管栄養含む)	56	5.8
マッサージ	51	5.3
爪切り	43	4.5
気管切開管理	36	3.7
口腔ケア	35	3.6
洗髪 (入浴介助がある場合は除く)	33	3.4
カテーテル管理 (膀胱留置、PTCD を含む)	23	2.4
HOT 管理	20	2.1
人工呼吸器管理	20	2.1
呼吸リハビリテーション	16	1.7

注) バイタルサイン測定・病状観察・相談など基本的なケアを除く

評価

1. 実習目標の達成に関する評価

実習目標に対応した14の評価項目を1～5の5段階で学生が自己評価し、教員も同項目で評価した。項目と平均得点を表1に示す。ほとんどの項目の平均得点が3.5を上回り、到達度という点からは実習目標は達成されていた。

得点の最も高かった「14 訪問時に知りえた在宅療養者とその家族のプライバシーに配慮できる」は、実習に際して高得点でなくてはならない項目である。「13 訪問者としてのマナーに配慮し、相手を尊重した言葉遣い、態度で接することができる」も同様だが、学生の自己評価よりも教員評価のほうが得点は低かった。この13, 14の項目は、ステーションから意見を聞いて教員が評価しているが、学生の考える訪問者としてのマナーとステーションの看護師の認識には差があるといえる。それ以外では「8

在宅という場における看護の役割について自分の考えを述べることができる」が自己評価、教員評価ともに得点が高かった。

2. ステーションによる実習評価

ステーション側から率直な意見を聞くために、「学生について気づいたこと」「利用者への影響」の2項目につき自由記載のアンケートを実習ごとに実施し、延べ110名の訪問看護師から回答を得た。

その結果、「学生について気づいたこと」では、学生への指導的意見と肯定的意見の両方が見られた。指導的意見として最も多かったものは、「もう少し自分のしてみたいことを言ってほしい」「もっと積極的に実習してほしい」などの積極性不足 (同様意見22) で、類似の意見として「質問が少ない」(7) があるほか、「血圧測定に自信がないようだ」「入浴介助や足浴などを行うとき、指示が必要だった」などの看護技術の未熟 (16) も多くあがっていた。

表3 学生が実習をとおして学んだ訪問看護・在宅看護（レポートより）

＜訪問看護とは＞ ・1人で訪問することがほとんどで、看護も1で行わなければならない。身体的援助をしながら、注意深く観察し、対象者および介護者・家族とコミュニケーションをとる。日常の介護の悩みがないかを聞き、問題がないか情報収集し、生活状況をよく把握していく確かな技が必要とされる。 ・訪問看護では、利用者とステーションの間の「サービスの利用者－提供者」という契約関係が明確なものであった。このことから、病棟の看護においても、いかにその人にとって有益な看護を提供するかという問題を強く考えさせられた。 ・施設との違いは、療養者の生活の場がかかわり、より深く関係がもてることだと思う。 ・訪問看護で最も難しい点は、患者さんとの距離の保ち方だと思った。訪問看護では個人と接する時間が長く、円滑なコミュニケーションが必要になると思われる。しかし、コミュニケーションが円滑になると両者の仲が深まるため、どこまで入っていくかラインを引くことが難しくなると感じた。
＜価値観に依拠して＞ ・家庭によってかなり価値観の違いがあり、自分たちの考えに基づいて工夫した介護が行われていた。たとえその方法が間違っているとしても、即座にその場で否定せず、その家族の価値観を大切にしながら、いまの頑張りを認め、少しずつ正しい方法を促していかなければならない。 ・訪問看護では対象者や介護者、家族の現状だけを見るのではなく、これまでの生き方、これからの生活、対象者の考え方を考慮していくことが大切なのだと思う。
＜訪問看護師の姿を見て＞ ・訪問看護師は利用者、家族、他職種とさまざまな人との関係を円滑に行っていた。 ・訪問看護師は「限られた時間のなかで自分のもっている知識と技術を駆使し、いまできる最大限の援助を行うこと」を心がけていた。 ・実際に患者さんに接するときは、自分の親または家族をみているかのように接していた。対象者の目を見て、ゆっくりと優しく話し、とても温かい雰囲気だったのが印象的だった。
＜家族への対応＞ ・訪問した際、家族が訪問看護師に何でも本音で話している様子を見て、強い信頼関係が成り立っていると感じた。 ・人手が充実している家庭に対しては、看護師は教育的な役割、カウンセラー的役割、情報提供の役割を果たしていた。人手不足の家庭に対しては、そのほかに介護者としての役割を果たす。看護師の役割は家庭の事情に応じて変わり、接し方、関係づくりの方法も変化することを知った。
＜療養者・家族の様子＞ ・わが家のにおい、見慣れた景色、愛着のある私物など、その人を取り巻く生活空間のすべてがその人をリラックスさせていた。療養者のリラックスした姿を見ることは、看護師がその人を本当の意味で理解することに大きくかかわっていて、個性のある看護が行われていると感じた。 ・介護者（家族）のなかには介護を楽しんでいる人もいて、愛情と自信をもって療養者の生活を支えていることが伝わってきた。マイナス思考で家族の介護を行う人ばかりではないことを知った。 ・訪問看護に対する家族の態度は、家庭によってさまざまであることを実感した。看護師と共に対象者の傍らにいて、ケアを援助し声かけを行う方や、反対に、訪問しても顔も出さずに別室にいらっしゃる方もいた。最初はなぜかと思ったが、サービスを利用する目的や、訪問時の介護者の時間の使い方によって大きく異なることを知った。
＜ターミナル事例から＞ ・家で療養するには多くの人のサポートや物品が必要であり、緊急時のリスクや家族の介護負担という問題点もあるが、少しでも患者さんのQOLを向上させたいという気持ちが在宅療養を選択する鍵になるのだと思った。生きたいという気持ちが強く、入院中は歩けなかったのに少しずつ歩けるようになった方、余命半年と言われたが2年近くも在宅で療養されている方がいらっやして、家族や医療従事者の協力が、患者さんが生きていくことに密接に結びついていることを学んだ。
＜精神科訪問看護に同行して＞ ・もともと他者とかがかわることが苦手な方が多く、それが理解されていない、いまの社会での独立は難しいことを学んだ。それでも社会生活に向けて一歩ずつ進もうとしている人を訪問して、服薬管理だけに訪問の意味があるのではなく、看護師とのコミュニケーションや共同作業が「一歩」になっていることを実感した。

（学生の終了レポートより、学生の許可を得て記載）

肯定的な意見として最も多かったものは、「積極的に学ぼうとする姿勢を感じた」「実習態度がまじめで積極的に参加していた」など積極性を評価したもの（22）で、次に「礼儀正しく訪問できていた」「訪問先でのあいさつや態度はよかった」など礼節はできていた（13）であった。また、「一生懸命気配りしていた」など一生懸命かかわっていた（11）、「初心に帰って自分も反省する」など自分にとって刺激になった（11）、声かけはできていた（11）などがあった。

“利用者への影響”としては、「若い学生さんの新鮮な笑顔に喜んでいた」など訪問を喜んでくれる（20）、「学生の呼びかけに笑顔で発語が見受けられた」などの刺激になる（13）、会話がはずむ（8）、ケアしやすかった（7）、楽しそうだった（6）、などがあった。

以上のように、利用者へのあいさつや礼儀はおおむねできていたが、学生の積極性については個人差が大きかった。また、利用者への影響については肯定的な意見が大多数であり、その背景には受容的な利用者に事前に承諾を得たこと、利用者と訪問看護師との信頼関係がすでに築かれていたことがあると思われた。

3. 学生による実習評価

学生による実習評価は、評価項目を「実習目標はわかりやすく示されていた」「実習記録は実習目標の達成に役に立った」など9項目とし、1～5の5段階で評価してもらった。得点の高かった項目は、「実習施設的环境がよかった」「実習中、必要なときに訪問看護師から指導・援助を受けることができた」であり、学生から見た実習施設としてのステーションの評価は高かった。一方、「学内オリエンテーションは役に立った」「学内のまとめは実習目標の達成に役に立った」「終了レポートは実習目標の達成に役に立った」の評価は低く、学習方法の検討の必

要性が示唆された。

考察——効果的な実習を目指すために

1. 目標達成と学習方法について

実習目標との関連では、「在宅という場における看護の役割の理解」に関する項目の得点が高く、また終了レポートにおいても訪問看護の独自性をとらえている点から、実習目的は達せられたと考える。しかし、学生による実習評価から、実習記録や終了レポートが実習目標の達成と結びついていないと思われた。また、実習に積極的でなかった学生もあり、実習目標の達成に向けて具体的な行動を提示する必要があると考える。また、実習評価の基準にあいまいな点があったので、次年度においては実習目標に照らした行動目標と明確な評価指標を作成し、学生に示すことにした。

2. 実習内容について

同行訪問の件数は、学生1日当たり2.4件であり、1日2～3件が限界である²⁾と言われているなか、妥当な件数と考える。訪問事例としては、「介護保険を利用する高齢者、脳梗塞、介護度5、日常生活自立度C」の人が多く、このことは訪問看護を利用する療養者全体の傾向³⁾を反映している。一方、小児から高齢者までさまざまな年齢、疾患、要介護度、日常生活自立度の療養者を訪問したことは、さまざまな価値観に触れる機会になった。

8か所のステーションのうち1か所は主に精神科訪問看護を行っていたため、療養者の主疾患は統合失調症が多く、行政機関で働く保健師との連携を考える機会となった。また、学生が見学および一部介助したケア内容は日常生活援助に次いでリハビリテーションが多く、学内の

講義で強化していく必要があると考える。

3. 学生のマナー、ステーション側の指導について

“利用者への影響”に関しては、あいさつやマナーはできていたことから、学内でのロールプレイやオリエンテーションの効果はあったものとする。しかし、訪問者としてのマナーに関する実習目標について、学生の自己評価の得点のほうが、ステーション側からの意見に基づく教員評価の得点より高く、マナーについての学生の認識が不足していると考えられ、今後も引き続き指導していく必要がある。

ステーションの訪問看護師の指導については、学生は高く評価しており、ステーションの温かい雰囲気のなかで指導を受けることができたと思われる。

まとめ

訪問看護ステーションを拠点として行った、本学1期生の在宅看護実習は、同行訪問で訪問看護の実際を学ぶことが主目的であり、同行訪問件数は延べ961件、学生1人当たり1日2.4件であった。実習目的はおおむね達成でき、学生は、療養者の反応や介護する家族の様子を見て、在宅という「場」のもつ空気を感じ取ることができた。さらに訪問看護師とかわることによって、療養者やその家族の価値観に合わせた援助の難しさを理解しており、“利用者への影響”については、肯定的なものがほとんどであった。利用者へのあいさつや礼儀はほぼできていたが、実習に対する積極性は学生によりばらつきが見られた。また、学生からは、ステーションの指導体制は非常に良いと評価された。

今後は、実習目標達成のための行動指標と評価基準を明確にしたうえで、オリエンテーション・学内演習を工夫し、ステーション側と密に

連携をとりながら、実習がより効果的なものとなるよう学生と共に努力していきたい。

ステーションのスタッフに感謝するとともに、学生を受け入れてくださった利用者および家族の方々に深く感謝する。

引用文献

- 1) 小林裕美：訪問看護ステーションにおける効果的な臨地実習をめざして、訪問看護と介護，8（10）：813-818，2003.
- 2) 川越博美編：訪問看護ステーション臨地実習マニュアル，医学書院，1999，p.30.
- 3) 厚生労働大臣官房統計情報部社会統計課：社会給付費実態調査（平成14～15年度4月審査分），財団法人厚生統計協会，2004.

※本稿は、2005年4月に執筆されたものです。

看護教員募集

看護師養成3年コース設立準備中
（平成22年4月開設予定）

応募資格

- ①専任教員として必要な研修を修了した方、または修了見込みの方。
- ②大卒かつ専門領域の臨床経験が3年以上の方
- ③看護師・保健師・助産師で実務経験が5年以上の方

*看護教員養成講習会受講者への支援あり

待遇

経験・年齢・前職での待遇等を考慮の上、優遇いたします。

勤務

勤務時間 8:30～17:00
休日 4週6休+祝祭日

応募方法

履歴書(写真、職経歴添付)を郵送ください。
詳細につきましてはご相談させていただきます。

医療法人博道会 看護専門学校 設立準備室

〒294-0037 千葉県館山市長須賀196
TEL 0470-25-5061 担当/出口
<http://www.awa.or.jp/home/tatehp/>